

金曜日の夜、日中から続いていた別の撮影が終わってから、二時間が過ぎていた。私は二十二歳。撮影スタジオに併設された事務スペースで、返却された機材と小道具の確認をしていた。ここで撮影しているのは、成人向けの音声作品や映像作品だ。私は事務スタッフとして、撮影予定の管理、小道具の受け渡し、使用後の機材の確認などを担当している。現場に出入りすることには慣れていても、照明の前に立った経験は一度もなかった。いつもは同じように残業している誰かがいて、その存在を勝手に心強く思っていた。けれど、今夜はそれすらないため、余計に心細かった。

「帰っちゃおうかなー……」

誰もいない事務スペースで頬杖をつきながら、ぼつりと呟く。今日の撮影はもう終わったはず。あとは明日の準備を少しして帰るだけ。連日の残業で疲れた頭を、早く帰って眠ることでリセットしたかった。

「……帰ろっと」

決意した自分を奮い立たせるようにデスクに勢いよく手をついてから、私は帰り支度を始めた。そのとき、奥のスタジオから三十代の監督、河野さんが慌てた様子で顔を出した。

「あ、ちょうどよかった、まだいた？　ちょっと困ったことになってさ」

聞けば、今夜撮影する予定だった女性モデルが、直前になって来られなくなったのだという。借りているセットを使えるのは今夜まで。明朝には解体が始まるため、男性演者の立ち位置と照明だけでも確認しておきたいらしい。

「服はそのままでもいい。床の印に立って、演者と高さを合わせてくれるだけ。カメラも回さないから」

私は事務スタッフだ。演者ではない。でも現場の

事情も分かるし、断れる雰囲気でもなかった。

「……立つだけなら」

「助かるよ。本当に位置を見るだけだから」

スタジオへ入ると、三人の男性演者が待っていた。人懐っこい笑みを浮かべた谷沢さん。肩幅が広く、快活そうな牧田さん。そして、その二人よりも少し年上に見える落ち着いた榊さん。

事務として顔は知っていても、照明の下で向き合うのは初めてだった。室内には壁とベッドを組み合わせたセットが作られていた。床には黄色いテープで立ち位置が示され、三台のカメラが違う角度からベッドへレンズを向けている。河野さんは私を中央の印へ立たせると、自分だけガラス窓の向こうにある調整室へ入った。河野さんが調整を続けている間、私は中央の印から動かず、しばらく待たされた。

(帰ったら何を食べよう。飲み物は何にしようかな……)

これから来る二日間の休みについてぼんやり考えていると、天井のスピーカーから河野さんの声が響いた。

「じゃあ、位置合わせを始める。演者は台本どおりに動いて」

カメラは回さないと言っていたとおり、レンズの上にあるランプは消えていた。

「触れるのは腕と肩だけですから」

「俺たちも動きを合わせたいだけなんで」

「嫌だったらすぐ言ってください」

演者たちが口々にそう言って、私を囲むように配置についた。帰り支度をしていたはずの私は、三方向からレンズを向けられたセットの中央で、三人の男性演者に囲まれていた。

「災難ですね、事務さんまで駆り出されて」

「本当に。すぐ終わるといいんですけど」

広いセットの中で、それぞれが自分の立ち位置につく。榊さんは立ったまま、牧田さんと谷沢さんは距離を測るようにしゃがんだり近づいたりしている。私も本当は帰りたかったけれど、河野さんの頼みを断りきれず、その場に残っていた。あまりに長引くようなら、途中で抜けさせてもらうつもりだった。

「こんな時間まで撮影なんて大変っすね」

「お互いさまでしょ？」

「俺たちフレックスみたいなもんで、来たの昼過ぎですよ。朝から事務してるほうが大変っすよ～」

この状況を紛らわせるような浅い雑談だった。ガラス窓の向こうには河野さんもいる。仕事として行われる確認なのだから、妙なことはないはずだった。雑談が途切れたところで、天井のスピーカーから最初の指示が飛んだ。